

魯迅集

第五卷

魯迅選集 第5巻

(全13巻)

1956年5月22日 第1版第1刷発行
1964年4月27日 改訂版第1刷発行 ©
1966年9月16日 改訂版第3刷発行

¥270.

訳者 ^{まつ}松 ^{えだ}枝 ^{しげ}茂 ^お夫

東京都千代田区神田一ツ橋2-3

発行者 岩波雄二郎

東京都板橋区板橋4-47-7

印刷者 白井知一

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩波書店
神田一ツ橋2-3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・松岳社製本

目次

墳

題記	五
文化偏至論	八
摩羅詩力説	三一
私の節烈観	九五
われわれは今日どのように父親となるか	一二〇
ノラは家出してからどうなったか	一二八
天才の出るまえ	一三八
雷峯塔の倒壊について	一四四
鬚の話	一四七
写真のあれこれについて	一五四

再び雷峯塔の倒壊について……………	一六三
鏡を見て感じたこと……………	一六九
春末閑談……………	一七五
灯下漫筆……………	一八二
雑憶……………	一九三
「他媽的！」について……………	二〇一
眼を睜 みは って見ることに……………	二〇六
鬚の話から齒の話まで……………	二一三
堅壁清野主義……………	二二四
寡婦主義……………	二三〇
「フェアブレイ」は時期尚早であること……………	二三七
『墳』の後に記す……………	二四八
補註……………	二五七
解説……………	二六九

墳

(一九〇七—二五年)

松枝茂夫訳

題記

これら体裁の全然ちがったものを集めて一冊の本にしたのは、別に堂々たる理由があったわけではない。

最初は二十年前に書きたいいわゆる文章を偶然幾つか見つけたためである。これが私の書いたものなのだろうか、と私は思った。見てゆくと、たしかに私が書いたもののようにもある。それは雑誌『河南』(河南省出身在日留学生の機誌)に寄稿したものである。その編集者には奇妙な癖があつて、文章の長いのを欲しがり、長いほど原稿料を沢山くれた。そのため『摩羅詩力説』(悪魔派詩人論)のような具合に、まるで無理に寄せ集めたものが出来上つたのである。近年だったら、多分あんな風には書くまい。その上、好んで奇怪な文句を作り、古字を使っている。

これは当時の『民報』(章太炎が日本で発行していた革命鼓吹の新聞)の影響を受けたのである。いま印刷の便宜上から、少し改めたが、その他は元のままにしておいた。こんな生硬なものは、もしもこれが他人のものだったら、私は多分その人に「割愛」するよう忠告したにちがいない。ところが自分のこととなるとやはりこれを残しておきたくなる。

それに「行年五十にして四十九年の非を知る」というが、年を取ると共にますます進歩するというようには、なかなかゆかぬものである。この文章の中でふれている詩人たちについては、今もって誰も取り上げようとしない。このこともこの旧稿を捨てるに忍びなくさせた一つの小さな原因である。彼らの名は、以前はどんなにか私を激昂させたことであろう。民国成立以後、私はすっかり彼らを忘れてしまった。ところが意外にも今日になって、彼らは又も時々私の眼前に立ち現われるのだ。

その次には、むろん、読みたいという人がまだある

ためである。いや、それよりも特に、私の文章を憎んでいる人があるためである。話をして、誰かに嫌われるのは、全然手ごたえのないよりは、幸福である。世の中には愉快でない人々が沢山いる。ところがある人々は一意専心、自分のために愉快な世界を造ろうとつとめている。それはそう都合よくさせてやるわけにはゆかぬ。彼らの眼の前に少しは憎らしいものを置いてやって、時には少し不愉快な目にあわせてやり、自分の世界も完全無欠にはなかなかならぬものだということを、思い知らせてやりたい。蠅は、自分が人に憎まれていることを知らないで、うるさく飛び廻る。しかし私は十分それを知っていて、いやしくも飛び廻れる限りは、わざとうるさく飛び廻ってやろうと思うのだ。自分の憎らしいことは、時には自分でも感じている。しかし私が自分の生命を延ばそうと思って、酒をやめたり、肝油を飲んだりするのは、必ずしも私の愛人のためにするのではなく、むしろ大半は私の敵——彼ら

に少し体裁のよい言い方をして、敵といっておこう——のために、彼の結構な世界に少しばかり欠陥を残してやりたいと思うからなのだ。君子の徒はいう。お前はなぜまばたき一つせず人を殺す軍閥を罵らないのか。それこそ卑怯というものではないか！と。だが私はそんな誘殺手段のワナにかかろうとは思わない。木皮道人（明末清初の賈魯西、明亡びてのち、『木皮道人（皮散人鼓詞）を作り、悲憤の情を託した）はいみじくも言っている。「幾年も軟い刀で頭を斬られ死を覚えない」と。私はかの「無鎗階級」（鉄砲を持たぬ階級）と自称しながら、実は軟い刀を持った妖魔どもを、専ら攻撃しようとしているのだ。上に引いた君子の徒の言葉のごときは、てっきりその軟い刀に外ならぬ。かりに筆禍に遭ったとすれば、彼らは君を烈士として尊敬するだろうか。いなである。その時はまたさんざん冷評を浴びせかけるにきまっている。うそだと思ったら、彼らがあの三・一八事件（一九二六年三月十八日、外交講義の学生団が北京の國務院執政府前で衛兵の發砲を受け、五十余名の惨死）で惨殺された青年をどのよう^{*}に評論した

か、見るがいい。

この外に、私自身にとって、なお小さな意義がある。それは、ともかくこれは生活の一部分の痕跡だということである。だから、過去はもはや過去であつて、魂を追いかけるわけにはゆかぬとはっきりわかつてはいなければならない、そうきっぱりと手を切ることも出来ない。なおも糟粕を集めて、小さな新墳をつくり、それを埋めると同時に、名残りを惜しもうと思うのである。遠からずして踏まれて平地となつたとしても、ちつとも苦にはしない。苦にしたところではじまるまい。

私は何人かの友人が、私に代つて蒐集^{しゅうしゅう}し、筆写し、校正して、それぞれ取りかえしのつかぬ多くの光陰をついやして下さつたことを、心から感謝する。私の返礼は、この本が印刷装幀^{しゅうしやうざん}成つた時、それぞれの人のまごころからの愉快な一笑を博することが出来ればと、せめてそのみを希望することである。それ以外に贅^{ぜい}沢^{たく}な望みはない。せいぜい、この本が、大道露店に積

みかさねられた本の中に、暫くでも横たわることができればと願う。ちやうど博厚なる大地が、どんな小さな土くれをも容^{ゆる}れるのにやぶさかではないように。さらに一步を進めると、もっともこれはいささか分に過ぎた望みであるが、中国人の思想や趣味は、幸い今のところ、まだいわゆる正人君子（自ら正義派の君子人をもつ態度で臨む）^{みささき}に統一されてはいないのだから、たとえば専ら皇陵^{みささき}を拜むことのすきな人もあらうが、なかには荒れ果てた塚をとぶらつて昔を偲ぶことを好む人もいるわけで、いずれにしても、まだ当分は一顧を惜しまぬ人も多分いるだろうと思われる。せめてそうであつてくれれば、私としてはこの上もなく満足である。その満足は富豪のお嬢さんを奥さんに貰う（論敵陳源が妾^{めかけ}とを皮肉^{かわ}つ）^{とを皮肉}のに決して劣りはしないだろうと思ふのである。

一九二六年十月三十日大風の夜、

廈門^{アモイ}にて記す 魯迅

文化偏至論

中国は、自尊をもつてすこぶる世界に有名であるが、口の悪い人に言わせると、それは頑固というもので、いまに滅亡する時まで、この残欠の遺文を後生大事に守って行くつもりだらうという。ところが、この頃の、新しい学問の言葉を聞きかじった連中は、この事を恥として、翻然として変革を思い、何事も西洋の道理と同じでなければ口にせず、西洋の方法に合わなければ行おうとしない。そして、ひたすら古い物を攻撃して余力をあまさず、旧来の誤謬を改革して、富強を図るのだと申している。余はかつてこう論じたことがある。昔、軒轅氏（黄帝のこと）が蚩尤（古代の伝説的先住民族の名）を平げて、中国の地に居を定めて以来、制度文物ここにはじめて起

り、子孫がこの国に繁殖すると共に、更新拡大されて、ますます立派なものになって行った。しかも、その四方に蠢動しゅんどうしていたものは、いずれも渺びようたる小蛮族にすぎず、それらの民族の創り出したものは、一つとして中国の模範とするに足りなかったため、進歩發達は、みな自己の力により、他から得ることはなかった。くだって、周・秦しゅう・しんの頃になると、西方には、ギリシア、ローマが起り、文化思想の燦然さんぜんとして見るべきものがあつたけれども、陸路は險しく、海上は荒波のため、交通をはばまれ、その美点を挾んで範とするわけにはいかなかった。元・明げん・めいの時代に及び、一、二のキリスト教伝道士が、教義、及び天文、数学、化学などを中国にもたらしたけれども、その道は盛んにならなかった。故に、鎖国の禁が解けて、白人が相ついで中国に来るようになる以前の、中国の世界における立場は、どうであつたかという、四方の野蛮な民族が、先進国を模倣するため、平身低頭して来朝するとか、或いは、

野心に燃えて、侵略を企てるとかいふことはあったが、中国と比肩し得るほど文化的に進んだ民族は、未だかつてなかったのである。中央に屹然と聳えて、競争相手がなないと、ますます尊大となり、自分の持ちものを尊重して、傲然と万物を睥睨するのは、たしかに人情として無理からぬことだし、道理からも大してはずれていないことである。しかしながら、競争者のないため、安逸の日が久しくつづくと共に、凋落の兆しが生じ、外からの刺激がないところから向上心も失せ、くたくたに疲れて行きなやみ、その極、善いことを見てもそれを手本にして学ぼうという気がなくなってしまう。ところが、西方に新しい国が林立し、その特異な技術をもつてやって来て、ただの一息吹きつけると、たわいもなく、へたへたと倒れてしまったものだから、人々ははじめて、これは大変だと気がつき、そこで猪口才な豆智恵のきく連中は、われがちに軍備の必要を唱え出した。その後、外国（日本を指す）に留学した者は、

近くは中国の事情にくらく、また、遠くはヨーロッパやアメリカの実際にも不案内なところから、拾つて来た塵芥を人の前に並べ立てて、軍備こそ国家第一の重大事だと主張し、また、文明開化の言葉を引用して自分の主張を飾り、インドやポーランドを例に挙げて、前車の覆轍と戒めた。そもそも、武力によって輸贏を争う場合に、それは文明とか野蛮ということと、一体なんの関係があるだろう。遠くは、ローマの東西ゴール（原文のまま。正）における、近くは、中国の蒙古・女真における、その文化の程度の隔りがどうであったかは、別に学者を待たなくてもわかるはずである。ところが、両者の勝敗の帰趨は、果してどうであったか。かりに、昔はいかにもその通りであつたらうが、今日では、機械が第一で、決して武力によって勝利を収めるわけではないから、勝敗の分れこそ、とりもなおさず、文明か野蛮かを分ける目安である、という人があるとする。そうだとすれば、なぜ人の知識を開発し、

その靈性を呼びさまして、網や戈^きは、せいぜい山犬や虎を防ぐための道具にすぎないということを教えないのか。そして逆に、白人の狩獵精神を、世界の文明の極致だなどといって、喋々^{ちやうちやう}と賞めそやしているのは、一体^{りようけん}どういう料簡であるか。かりに論者のいうとおりだとする。しかしながら、国全体がまだ弱かったならば、これに大きな武器を与えたとしても、とてもその任にたえられず、やっぱり倒れて死ぬばかりだろう。ああ、そういうお方は、飯のたねにするために軍事を勉強しているので、根本を考えず、ただ自分の学んだ知識をひっさげて、天下に祿を求めているのだ。胃^{かみど}を目深にかぶって顔を隠したところは、いかにも威武犯すべからざるように見えるけれども、うまい口にあるところとしている様子は、ありありと外に出ているのだ。さて、その次に、工業、商業及び立憲、国会を主張する人々がある。前二者は、元来、中国の青年の間で重んぜられている。これを主張しないにしても、こ

れを実行している人は、枚挙にいとまがないほどである。それというのが、国家が一日でも存在している限りは、富国強兵のために尽すという名を借りて、志士の譽^{ほま}れを博することができるからである。かりに不幸にして、社稷^{しゃしよく}が廢墟になったとしても、莫大な財産を擁して、大いに豊かな生活が送れるだろう。よしんば、祖国が亡びて、たとえばユダヤの遺民のように、虐殺されるようなことがあったとしても、上手に逃避したならば、自分だけは害を受けずにすむこともあろう。かりに、身に大難がふりかかったとしても、運よく免かれた例も、ないわけではないし、その人が、また、上手に立ち廻ったならば、再びもとのように、ゆたかな生活が送れるのである。後の二者の主張については、とくに論ずるまでもあるまい。そのうちの、比較的ましな部類は、外侮^{がいぶ}が相ついで到って、寧日もないことに、心から痛憤する連中である。しかしこの連中は自分に学がなく、何もわからないものだから、やむを得

ず、他人の智恵の残り物を拾い、群衆をかり集めて、抵抗しようとする。そしてまた、群衆を煽動して、巧みに騒乱を起す。自分と異う者が台頭するのを見ると、必ず多数を恃^{たも}んで少数者をいじめる。名を大衆の政治に借りているが、その圧制よりは、暴君よりもはげしいのである。これは甚だ道理に背いているばかりでない。たとい、救国を図るためには、個人を犠牲に供してもいとわな^いとしても、彼らは物事を深く考えず、思慮が浅薄で、事の由^ゆって来る所以^{ゆえん}がとんと解らぬものだから、すぐと多数の意見に従うのである。これは、いわば、痼疾を抱いている人が、医薬衛生の手段を捨てて、えたいの知れない力の御利益^{りやく}を乞い、加持祈禱者の門に額^{ぬか}ずいて祈るのと、少しもかわらないのである。更に、下の下で、大多数を占めているのは、いずれも、空名を借りて、私欲を遂げている連中である。彼らは實際的な事は一切顧みず、実行發言の権利は、すべて、立身出世を求めて奔走している徒輩や、

或いはきわめて愚鈍な金持や、さもないければ、利権の独占に巧みな商人に、全部やってしまったて、ただその得意のもぐり込み戦術によって、彼らの仲間にもぐり込んで、分前にあずかるのである。まして、私利という悪名を、多数の福祉という美名で掩^{おほ}い、成功の近道が目のあるので、つまずき転ぶのもかまわず、これを追求するのだ。ああ、昔、人民に君臨したのは、一独夫^{（暴君）}であつた。ところが今日の行き方で行けば、それが急に一変して何千何万の無頼^{むらい}の徒になったわけである。これでは民はとも生きてはいけぬだろうし、国家の復興には、結局、なんの貢献するところもないのだ。しかし、そういった連中が、鳴物入りで宣伝する場合には、大抵、近世文明を後盾に頼まないことはないのである。そして、その説に反対する者が起ると、すぐその人を野蛮人呼ばわりして、国家を辱しめ、社会に損害を与えた罪は、追放の刑よりも甚しい、ときめつける。ところで、彼らのいわゆる文明とは、果し

て、一定の規準の下に、慎重に取捨し、その美点長所を示して、これを中国に実行することの出来るような文明であろうか。それとも、既成の事物や旧来の制度は、一切がっさい棄てて顧みず、ただ西方の文化だけを指す言葉なのであろうか。物質だ、多数だ、というものには、十九世紀末葉の文明の一面があるかも知れない。しかし筆者は、それは決して当を得ているとは思わない。というのは、今日の成果は、どれ一つとして前代の遺跡を継承していないのだから、文明は、必ず日に日に變転して行くものであり、また、時には前代の主潮に反抗するから、文明はどうしても偏至(偏向)を免かれない。本当に、今日のためを思うならば、宜しく既往にかんがみて、未来を測り、物質を排して、精神を重んじ、個人を尊重して、多数を排斥すべきである。人間の精神が作興して潑刺(はうち)となりさえすれば、国家も従って興起するのである。何ゆえに枝葉末節を取り入れるのを事とし、いたずらに金や鉄や、

国会や立憲のこのみを口にするのであるか。そもそも、權勢私利の念が心の中にたけり狂っていると、是非の判別はつかなくなり、措置も主張も、妥当を欠くようになる。況んや、品行下劣で、新文明の名を借りて、己が利欲をほしのままに遂げようとする輩(やから)においておやである。それ故、今日のいわゆる、時務を知る人士とは、もしもその実体を察するならば、その多数はつねに、赤い豆をルビーだと思つて宝物としている盲人であり、そして少数の者は、エビで鯛を釣ろうという大それた考えを抱いている大悪人である。かりに、そんなものではなくて、衷心、みな中正で汚点のない人々だったとする。そして、彼らは艱難辛苦をかさね、そのすぐれた才能を發揮して、ようやくその希望を達成し、ついに、彼らのいわゆる新文明なるものを、こことく中国にとり入れることができたとする。ところで、この變転し、偏至するところの物は、外国ではとうの昔に骨董品となつてゐるしろものなのである。

そういうものに向つて、香を焚いて礼拝するとは、どうしてわれわれは、こうも馬鹿なのであろうか。これはどうしてか。物質だ、多数だ、というのは、その道が偏至しているのである。歴史の事実に基づいて、西洋に出現したのは、やむを得ない。しかし、それを是が非でも取つて来て、中国にあてはめようとするのは、間違いである。何を根拠に、間違いであるというのか。請う、その根本より説かしめよ——

そもそも、世紀の起源は、イエスの誕生に始まる。百年を経過する毎に一世紀となし、大事件が起ると、その世紀に属する事件とする。これは、旧来の習慣に従い、これを借用して区分したまでで、別に深い意味はないのである。實際上、人事というものは連綿として続いており、深いところに根柢がある。たとえば川が必ず水源から発し、花や木が根から生じているようなもので、一瞬にして隠れたり、現われたりするようなことは、道理からいって、決してあり得ない。だか

ら、もしも、その脈絡と本末を辿って行けば、大むね、互いにつながっていて分離できないのである。たとえば、何世紀の文明の特色はこれこれだ、などというのは、特にその顕著な部分をとりだして言ったにすぎない。これを史実に照していえば、ローマがヨーロッパを統一して以来、はじめて大陸共通の歴史が生じた。その後、ローマ法王が、その権力によつて全ヨーロッパを制御し、列国は靡然としてその束縛を受けて、同一の社会の如く、国境はなくなり、一区域となつたに等しかった。その上、人心に手枷てがせをはめて生気をなくしたため、思想の自由はほとんど失われ、聰明卓越せる人物は、新しい真理を発見し、新しい思想を抱懐していても、教会の規則に縛られ、みな堅く口を閉じて、発表しえなかつた。しかしながら、人民は大波のように、阻はまれれば阻まれるほど、大きくひろがって行く。かくて、始めて宗教の繫縛から脱出しようと考えようになり、イギリス、ドイツの二国には、特に不平を抱

く者が多かった。法王の宮廷は、実に衆人怨嗟の^{まじ}的となり、また法王がイタリアに住んでいたために、イタリア人も共にこれを憎んだ。おびただしい人民が、こぞって不平を抱く者に共鳴し、凡そ教会の命令を拒み、ローマ法王に反抗する人があれば、是非善惡の區別なく、直ちにこれに賛成し、これに味方した。その時、ルッター(M. Luther)という人がドイツに起った。彼は、宗教の根元は信仰にある、制度や戒律はみなその花にすぎない、と喝破して、痛烈に旧教を攻撃して、これを打倒した。彼の創始したことは、階級制度の廃棄であった。法王、主教などの称号を撤廃し、牧師をもつてこれに代えた。牧師は神の教えを説くことを務めとして、社会の中に身を置き、一般人と異らないのである。儀式や祈禱のやり方も、簡略にした。彼がもつとも精神を注いだのは、牧師の地位を、一般人より優位に置かないことであった。変革の氣運ひとたび到るや、激しい震動はあまねくヨーロッパ一帯に

波及した。それによって改革されたのは、宗教のみにとどまらず、その他の分野にまで波及した。すなわち、国家の離合、戦争の原因など、その後の大變動は、多くこれに基づいているのである。これに加うるに、束縛が弛^{ゆる}み、思想が自由になって、社会のどこにも新しい生氣が漲ったために、その後の形而上学の発見と自然科学上の発見はの中から生れたのである。更にまた、種々の新しい事件が起った。すなわち、新大陸の発見、機械の改良、学芸の發展、及び貿易の開拓などがこれであり、いずれも、束縛を解いて人心を自由にしない限り、決してあり得ぬことであった。しかし、世の中の事は、たえず動いて、安定しないのが常である。宗教改革が一段落すると、おのずから、更に進んで政治の変革を求めるに至った。その由来を溯ってみると、さきに、ローマ法王を顛覆する際、ひとえに君主の権力を借りた。ところが改革がすむと、こんどは君主の力が大きくなり、一個の考えで万民に君臨し、